

10月1日

カナの婚宴

(ヨハネ2:1-11)

母、イエスに言ふ「彼らに葡萄酒なし」。イエス言ひ給ふ「女よ、
 我と汝^{かかわり}との何の關係あらんや、わが時は未だ来らず」……イエス僕に
 「水を甕^{かめ}に満たせ」……饗宴長、葡萄酒に化^なりたる水を嘗^なめたり：
 イエスこの第一の徴^{しるし}をガリラヤのカナにて行へり。(ヨハネ二・三、四、七、
 九、一一)

イエスの故里ナザレの東北方のカナの村に婚宴があつた。母マリヤばかりでなくイエス
 と弟子たちも招かれた。相当の人数が婚宴に招かれたと見えて、途中で葡萄酒が尽きたの
 で母がイエスに告げた。ところがイエスは母の言に対してそっけないような答を右の如く
 した。キリストは唯天の父の御意に従うのみで、母に無責任な答をしなかつたのである。
 キリストの「わが時」はいつも神の時なのである。勿論母の言を聞いた次の瞬間にイエス
 は心の中で祈った。祈りの中で父のみ旨が来た。食事に用いる水甕が六個あつたので、そ
 れに満水を僕どもに命じた。満水と同時に天来の力が臨んだ。水は葡萄酒に化^なつた。饗宴
 のところへ葡萄酒が運ばれた。さきの酒よりこの酒の方が味が優^{すぐ}れているではないか。驚
 いた。饗宴長は新郎を誉めた。彼にはキリストに於てはたらいだみ霊の愛の力などわから
 なかつた。弟子たちも驚いた。これがキリストの愛の力の第一の徴であつた。実にイエス
 自身が父なる神の最大の徴でそれが自在に言行に於て徴として現われる伝道であつた。水
 は霊水になる。大気は霊気になる。言は霊言となる。歌は霊歌となる。医術は霊術となる。
 キリストの中に深く祈り入り、我々自身キリストの徴とならん。

10月2日

イエスとサマリヤの女
(ヨハネ4:3-42)

「この水を飲む者は誰でも渴く。だが私が与える水を飲む者はいつでもでも渴くことがない。私が与える水はその人の中で湧きでる泉となつて永遠の生命をもたらす。」

「女よ、私に信頼せよ。この山でもエルサレムでもなく、お前たち父（なる神）を拝する時が来る。まことの礼拝者たちが霊と真を以て父を拝する時が来る、今もう来ている。」

ユダヤからガリラヤへの途次、サマリヤのスカルという町にイエスは立ち寄った。そこには有名なヤコブの井泉がある。サマリヤの女が水を汲みに来たので、イエスは「飲ませてくれ」とたのんだ。女は「あんたはユダヤ人なのに何で（仲の悪い）サマリヤの女に飲ませてくれなど言いなさる。」問答がつづく。イエスは右掲の言を吐露した。イエスの与える水は、霊水である。即ち聖霊である。問答の中で、イエスは彼女の素性をずばりと言ったので、女は驚き、イエスを預言者だと告白する。

イエスは礼拝所は「此の山」ゲリジムでもなくエルサレムでもない。本山は到る処にあり、時刻はいつでもよし。という真の礼拝・真の宗教が何であるかをずばり喝破した。「霊と真」を以て、とは「聖霊に在って本気で」ということだ。女はすっかり驚きよろこんで町へ走っていった。「来てごらん」と人々をイエスのみ許に伴れてくる。まことにキリスト自身が神殿。我々自身が聖霊の宮。生活そのものが礼拝ということだ。



(ヨハネ4:3-42) イエスとサマリアの女

10月3日

無者キリスト

(ヨハネ5:19-47)

五・二〇
父は子を愛してそのなす所をことごとく子に示し給ふ。我自ら何
ごともなし能はず、ただ聞くままに審くなり。わが審判は正し。そ
はわが意を求めずして、我を遣はし給ひし者の御意を求むるに因る。
汝らは書物（旧約聖書）に永遠の生命ありと思ひて之をしらぶ。さ
れどこの書物は我につきて証しするものなり。

普通は信仰が一種の信念で、精神的統一をもった力だと思っている。ところがイエスはそんなことは言わない。彼はひたすら父に祈り入って、父から聞き、父を見、存在的には父のふところに入って一如一体となっている。だから父から力ある言を賜わってそれを語り、力ある業を行ぜしめられるだけである。であるから「わが教はわが教に非ず、我を遣はし給ひし者の教なり」(七・二六)と言っている。イエスは彼自身、無能、無意、無言、無教の人である。それで私はイエスのことを無者と申している。自分を何者ともしないでただ父なる神一切、一点張の人である。それで靈界からの無限無量な言、行が展開した。福音書のおどろくべきドラマの中のキリストの言葉も行為も全く神の力に源泉がある。力と光と生命と智慧と義と愛に満ち溢れている人である。無即無限無者たる実存だ。だからこのキリストに降参して、キリストの中に全身投入すると、ふしぎなことになる。投入の門は十字架、そこを平伏して通ると詩篇第二十三篇の如き自由の天地が展けてくる。

10月4日

我は生命のパンなり

(ヨハネ 6 : 22-71)

六・三三

「神のパンは天より降りて生命を世に与ふるものなり。」^{三五}「我は生命のパンなり、我に來たる者は断じて飢えず、我に信じ入る者は断じて渴かず。それ我が天より降りしは、わが意^{こころ}をなさん為に非ず、我を遣はし給ひし者の御意をなさん為なり。わが父の御意はすべて子を見て信じ入る者の永遠の生命を得る是なり。我れ終末の日にこれを復活せしめん。」

イエス言ひ給ふ「誠に誠に汝らに告ぐ、人の子の肉を食はず、その血を飲まずば汝らに生命なし。」

キリストは我々に永遠の生命を与えたくて仕方がないので、このヨハネ第六章で徹底的に語りかけている。神の欣喜給う業^{わざ}(単数)(六・二八)はキリストの中に信入することだ、と。即ち信仰即行で靈的に全身的に信じ入ることが業だという重大な言である。信仰即行、即信交である。それはもっと烈しい表現では、自分は天来の生命のパンだから食べろ、神の羔だからわが肉を喰い、わが血を飲めという。キリストの靈的生命を沙漠の宗教らしく具体的な血と肉で語っておられる。キリストを食べれば永遠の生命となる、という。そしてキリストと生命の一如の關係に入る。エン・クリスト(キリストの中に)という一体の靈的現実である。こういう信仰即行という全身の消息が使徒たちの信仰の現実であった。聖餐式ではなく、靈的現実で「主よ、あなたは私の血の血、肉の肉です」と告白するのだ。

10月5日

キリストの栄化

(マタイ17:1-8)

(マルコ9:2-8)

(ルカ9:28-36)

六日の後、イエスはペテロ、ヤコブ及びその兄弟ヨハネを伴れてひそかに高い山に登った。かくて彼らの前で変貌し彼の顔は太陽の如く輝き、彼の衣は光の如く白くなった。すると見よ、モーセとエリヤが彼(イエス)と語るのが彼らに見えた。……彼(ペテロ)がなほ語っているうちに、見よ光る雲が彼らを掩った。すると見よ、その雲から声があつて言う、「これはわが愛する子、我これを悦ぶ、汝らこれに聴け」と。弟子らはこれを聴いて平伏し、いたく恐れた。イエスは近づいて彼らに觸れ「起きよ、怖れるな」。(マタイ一七・一七)

これは所謂「変貌の山」の記事だが、ピリポ・カイザリヤでの弟子たちとの会話で、彼がメシヤ(キリスト)であることを弟子たちに語ってから一週間前後のことで、高い山というのはおそらくその北方のヘルモン山だと思ふ。白雪をいただくこの世はなれた神秘的な山で、彼が祈り給うや右掲の如き相に栄化し給い、旧約の代表的人物モーセとエリヤが現れた。そしてイエスの十字架の死のことが語り合われた(ルカ九・三一)。ペテロはイエスとモーセとエリヤのために三つの幕屋を張りましようなどと(マタイ一七・四)ペテロらしい思いつきを口走った。その間霊雲が彼らを掩うと見るや、イエスのヨルダンに於ける受洗の時と同じ天来のみ声がひびいて来た。三人の弟子は平伏した。イエスは彼らに按手して起してやった。このキリストの霊的栄化は正に復活のキリストの予徴であった。

10月6日

「ペテロの魚」

(マタイ17:24-27)

一七・二七
彼らを躓かせぬ為に、湖へ往つて釣を垂れ、初めに上る魚を取れ、その口を開くと銀貨を見出だす、それを取り出だして、私とお前の為に彼らに納めよ。(マタイ一七・二七)

この記事はマタイ福音書特有のものである。これはガリラヤ湖北岸の村カペナウムの岸辺の出来ごとである。取税人どもにペテロは神殿納金のことを訊かれた。「あんた方の先生は納金を納めないのか」と。イエスがメシヤだとの噂が立ちはじめていたからである。ペテロは「納めるよ」と答えた。その問答を早くも察知したイエスはペテロに「シモンお前はどうかと思うか、世の王たちは税や貢を誰からとるか、自分の子からか、庶民からか」。ペテロは答えて「庶民からです」。イエスは「そうかそんなら(神の)子(自分)は自由だ」。だけれども、彼らを躓かせない為にとって右掲のふしぎな指示をした。「銀貨」と訳した原語は「スタテール」で、一シケル銀貨のことである。半シケルは二ドラクマで、ユダヤ人は二ドラクマ納税をエルサレム神殿になす義務があった(出三〇・一三以下参照)。この魚の口から出た銀貨は一シケルで四ドラクマになるから二人分の納税金に相当する。こういうふしぎな魚が釣にかかることを看破するキリストは全く大へんな人である。我々が一九八一年の春聖地の旅をした際、三月二十八日(土)のことであった。正にこの故事の湖辺の家で昼食を認めた際、「ペテロの魚」という鯛に似た魚が食卓にのぼった。この旅のガイドをしてくれた当時エルサレム大学生であった手島勲矢君がシケル銀貨をその魚の口に銜えさせて一同に見せてくれたのはまことに印象的であった。

10月7日

童心の天国

(マタイ18:1-4)

(マルコ9:33-37)

(ルカ9:46-48)

我誠に汝らに告ぐ汝らひるがえ翻りて幼兒の如く成らずば、天国に入るを得じ。
(マタイ一八・三)

山から降りてくる道すがら弟子どもは天国で大なる者は誰だろうなどとかくだらぬ話合いをしていた。カペナウムに辿りつくと、イエスは十二弟子を呼んで(マルコ九・三五)、頭になろうと欲う者は、人々の奉仕者となれ、と諭した。そして幼兒を抱いて、右の言を語り出でた。幼兒、あの幼稚園の兒童たちの言動は全心即全身的で、心身一如のあり方、動き方である。キリストはあのような全的な在り方を尊重した。(マルコ一〇・二三―一六参照)そして「幼兒たちの守護天使は天に在ますわが父のみ顔をつねに見ている」という靈的消息を語った(二八・一〇)幼兒は單純に神さまと信じ、心から祈る。こういう存在を侮ったり、顧かせたり、いつわったりする者は「大なる礪臼を頸に懸けられて海の深处に沈められた方が好い」(二八・六)などと烈しい言をキリストは吐いた。

「幼兒の如く」とは、瞬間に全存在をいつわりなく投ずる生き方である。あるがまま太陽の如き心根で言動する在り方である。神・キリストの前にぶっつぶれた碎けの心根である。キリストの愛に圧倒されて聖靈に燃えている生きざまである。どんな芸術家も学者も、政治家も軍人も、医者も実業家も、教育者も会社人もいかなる天職の人も、本当に天的童心を以てうちこむ人には偉大性が具わる。男も女も童心なくしては天国に入れない。

10月7日

(詩) 幼児の如く

作詞1980. 11. 26

(マタイ18:3) 歌調S. 538 「すぎゆくこの世」

幼児の如く

1

母の乳房を 吸う兒の如く
主のみ霊をば 飲みてぞ生くる

2

母がすべての をさなごの如
わが身を全く 主に投げ入れぬ

3

主のふところに 祈り入りてぞ
み霊は臨み 力に溢る

4

エン・クリストに 生くるわが身に
み霊の力 みなぎりあふる

5

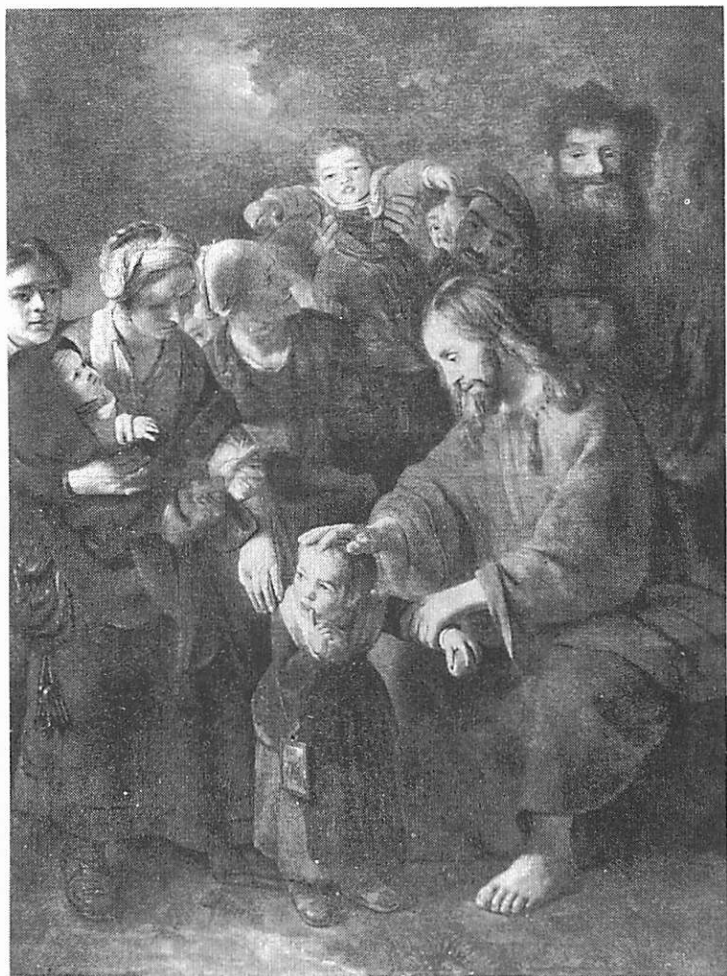
み霊の流れ 脈々たれば
み民われらは 生命の泉

6

み霊の火焰^{ほのお} 炎々^{えん}たれば
何をかのぞまん 力ぞみつる

7

いざや我らは 燃ゆるみ霊を
胸中^{みみち}に宿し 灯^ひを点さなん



(マタイ18:2, 3) キリスト・イエスと幼児

10月 8 日

幕屋の原相

(マタイ18:20)

二三人が集まって我が名の中へ入ったら、その人たちのただ中に我は在る(マタイ一八・二〇)

この聖言はマタイ福音書だけにある。神・キリスト・我という縦の垂直関係は、聖霊の媒介によって四位一体的に成り立つ。これが宗教的実存の原相である。

キリストの右掲の聖言は、エクレンシア(教会、召団)の原相である。キリストの名の中へと入るためには聖霊が臨んでいなければならない。聖霊内住の前提的土台は十字架の贖罪を体受するところに在る。右の事態を図形的に表現すれば、十字架の柱を中央に立てて、三角垂体の幕屋(天幕)を張ると、頂点をS(十字架の頂点)としたS・a・b・c(a・b・cは平面上の各個人)という一番単純な三角垂体の幕屋が張れる。幕屋の空間は聖霊が充滿している。私はこのことに一九四二年三月八日にヒルティーの「眠られぬ夜のために」の第一巻(独乙語原文)のこの日付の処の最初のくだりを読んだとき靈感の如く閃めいたのであった、幕屋! という語が。ヒルティーはそこで「基督教団は未だ嘗て一度もその創設者の考えに完全に適合した全く正しい形成を見たことがない」と言っている。幕屋! 即ちイスラエルに自現したエホバ(ヤハウェー)の神は幕屋を張らせながら民と旅をしている。創世記から黙示録まで、即ち神の歴史は神が人と幕屋を張りながらの旅で、創造の晨から歴史の終末、新天地の神の国の到来まで、幕屋がエクレシヤの本態である。原相である。キリストのこの聖言がそれを指示している。

10月9日

愛と永遠の生命

(ルカ10:25-28)

(マタイ22:34-40)

(マルコ12:28-31)

一〇・二七
 彼(教師) 答えて言う「汝主たる汝の神を愛せよ、汝の全心で、
 汝の全魂で、汝の全力で、また汝の全念で。そして隣人を汝自身の
 如く愛せよ」と。彼(イエス) 言い給う「正しく答えた、汝これを
 行へ、そうすれば生きる。」(ルカ一〇・二七、二八)

或る教師がイエスを試みる作意で、「先生、永遠の生命を嗣ぐには何をしたら」と訊ねた。イエスは律法に何とあるかと反問した。教師の答は右掲の如くであった。これは旧約の申命記六・四の「聴けイスラエルよ…」のひとくだけにある句でユダヤ人なら幼児も暗誦できるもの。「隣人を汝自身の如く」はレビ記一九・一八下の句である。すると教師は己れを義とせんとして「隣人とは誰ぞ」とまた設問した。これに対してイエスはかの有名な「憐れみ深いサマリヤ人」の話をした(ルカ一〇・二九-三七)。教師は完全にやつつけられたわけである。

イエスにとっては宗教・道徳は実践の世界のことで、実存に裏づけられていない道徳や信仰論は空しいことをこの教師たる偽善者、パリサイ人に示したわけであった。恵・信・言・行一如の実存構造が身につくまでは所謂信仰も空しい。まず神・キリストの恵みが何たるかを福音書のドラマに体当りして体感することだ。キリストの言は言葉で力をもっている、彼の行為もみな愛の力の現われだ。極まるところは十字架の贖罪死、永遠の生命の実証たる復活、愛の力たる聖霊の降臨。是らに圧倒されると、聖霊の力がくる。かくて恵・信・言・行一如の消息が身についてくる。この愛こそ永遠の生命の実質である。

10月10日

深处ふかみに漕ぎ出でよ！
(ルカ 5：1-11)

「^{五・四}深处こに漕ぎ出でよ！ 網おろを下して漁れよ！」^五「先生！ 夜通しや
つてみたんですけれど、空からつき駄目でした。だけれど、御言通
りに網を下しましょう！」（ルカ五・四、五）

イエスは渚なみに寄せてあつたペテロの舟に乗って、舟の中から汀みづがに蟬集して来た群衆に福音を語った。語り終ると、ペテロに「深みに漕ぎ出でよ！ 網をおろして漁れよ！」と命じた。ペテロは右掲の如く答えた。漁獲にかけては玄人くろうとのペテロである。素人しろうとのイエスの言は普通なら「何をおっしゃる」といって拒否されるところだ。前夜の時化から判断してダメだと思つたから二艘の舟人は網の整理をやつていたところである。

けれどもペテロは信頼する先生の言だ、イエスの言は言霊ことばたまの宿つてゐる言だ。それで自分の経験も判断も乗り越え打ち消して、「だけれど」と言つて師の言に従つた。すると驚くなかれ大漁ではないか。もう一艘も呼び寄せたが、二艘の舟も沈まんばかりの大漁とは！ 大漁に驚き、師を畏れ「どうぞ私から離れて下さい、私は罪がある者です、主様！」とペテロらしい言を放つた。「懼れるな、お前は今から人を漁ることになるぞ」。大漁は大伝道の徴であつた。勿論ペテロはまだまだである。キリストに何度も蹢く。復活のキリストにすら蹢く。ペンテコステの聖霊降臨を受けて、はじめて本当に眼が醒めた、別人とされた。「^{五・四}深处こに漕ぎ出でよ！」キリストのこの一言を我々は確しかと胸に受け、自己を突破してキリストという深处に突入することだ。するとえらいことが起きる。これを体験体现する人は人生の勝利者とされる。

10月10日

(詩) 「深所に漕ぎ出でよ！」

(ルカ 5 : 1-11に因みて) 作詞1986. 7. 31.

歌調: 「卯の花の匂う」: 夏は来ぬ

深所に漕ぎ出でよ!

一 ゲネサレの 湖の岸べの

群衆に 舟より語る

イエスのみ言 み霊の波

二 「やよベテロ 舟を深処に

乗り出だし 網をおろせよ

漁り大ならん いざ往けよ

三 「終夜 勞したれども

徒らに 漁りしのみ

されども み旨に従はん

四 こは如何に 大漁のために

網は裂け 舟は傾き

二艘の舟に 魚は満つ

五 驚きて ベテロは言へり

「去り給へ 主よわが神よ

み前に堪えず 罪の身は」

六 キリストは ベテロに言へり

「懼るなよ 汝今より

世の人々を 漁らん!」

七 主よ、然り 我を否みて

み力を 全身に受け

深き情けの 旅路往かむ

10月11日

イエスと富める青年

(マルコ10:17-31)

(マタイ19:16-22)

(ルカ18:18-23)

「なぜ私を善いと言うか。神一人のほかに善い(といえる)者は居ない」(マルコ10:18)

イエスがガリラヤ方面から南エルサレムに向う最後の旅の途上に青年が走り寄り、跪ひざまづいてイエスにたずねた「善き先生、永遠の生命を嗣ついでぐには何をしたら好いですか」と。ユダヤの青年の問題意識はすばらしい。永遠の生命と行為の関係を問うている。今の日本の青年にこのような問題を問題としている者果して在りやである。

ところでイエスはまづ何と言ったか。右の言の「善き先生」がイエスの心につかかった。「何故私を善いと言うか。善い者は神の他に一人も居ない」と断乎として喝破した。イエスは自分を何者とも思っていない。無善、無教、無行者なのである。彼は皆神から臨む善、愛、教、言、行を体現しているまでのことである。だから私はイエス・キリストのことを無者と申し上げているのである。

次にイエスはモーセの「十言」(誠)をお前は知っているか、どうだなと訊いた。「幼い時から遵したがつております」と青年は答えた。イエスは感心だと愛あいしんで目を止めて更に言った。「だがなほ一つ欠けているよ、往いつてお前の所有物をみんな売って貧者に施せよ、そしたら宝を天に得る。そして私に従したがいて来なさい！」(二〇・二二)。金持ちの青年は悲しんで踵かかとを返して去った。イエスは弟子どもに言った、「金持ちが神の国に入るより駱駝らくだが針の孔を通る方が易しい」(二〇・二五)と。当時「針の孔」という名称の狭い門があったのでイエスはこう言った。金持ちに限らない。凡そ人間は自分の財力、体力、智力、権勢、等々に於て自分を惜しんでいる。おのれを神有として無者魂になれとのみ旨だ。

10月12日

マルタとマリヤ

(ルカ10:38-42)

「なくてはならないものは少ない、否唯一つだ」(ルカ10:42上)

多分ベタニヤだと思われるが、ある村にイエスは弟子どもと進んで行った。マルタが外に出て行ってイエスたちを家に迎え入れた。妹のマリヤはイエスが話を始めると足下に坐つて御言に聴き入るのであった。マルタはおもてなしのことに心をくばって饗応に忙しい。マリヤが自分を助けないので、イエスのところへ来て「主様、妹が私一人に働かせているのを何ともお思ひになりませんか、妹に私を助けるようにお命じになって下さい」と言った。主はこれに対して「マルタよマルタよ、お前はいろいろなことに心を配り氣をつかっている。だけれど無くてならぬものは少ない、否唯一つだよ。マリヤは善い方を選んだ、これは彼女から奪つてはならないものだ」と答えた。これはルカ伝特有の記事である。

マルタは黙つておもてなしに専念していればよかった。イエスはそれはそれで認めなさる。マルタの心は分裂した。マリヤは専らイエスの言を喰つていた。聴くべきときに全身を耳にするのがこの時最善の道であつたから、イエスはマルタに右の如く言つた。静のマリヤ、動のマルタ、ある時はマリヤとなり、ある時はマルタとなる。静動自在な在り方が本当だ。どの道全的でなければならぬ。

キリスト者にとって無くてならぬものが唯一つある。聖霊、キリストの霊である。聖霊は無限無量の内実をもつ霊で、これは何ものとも替えられない。わが生命の生命だ！

10月13日

ラザロの復活

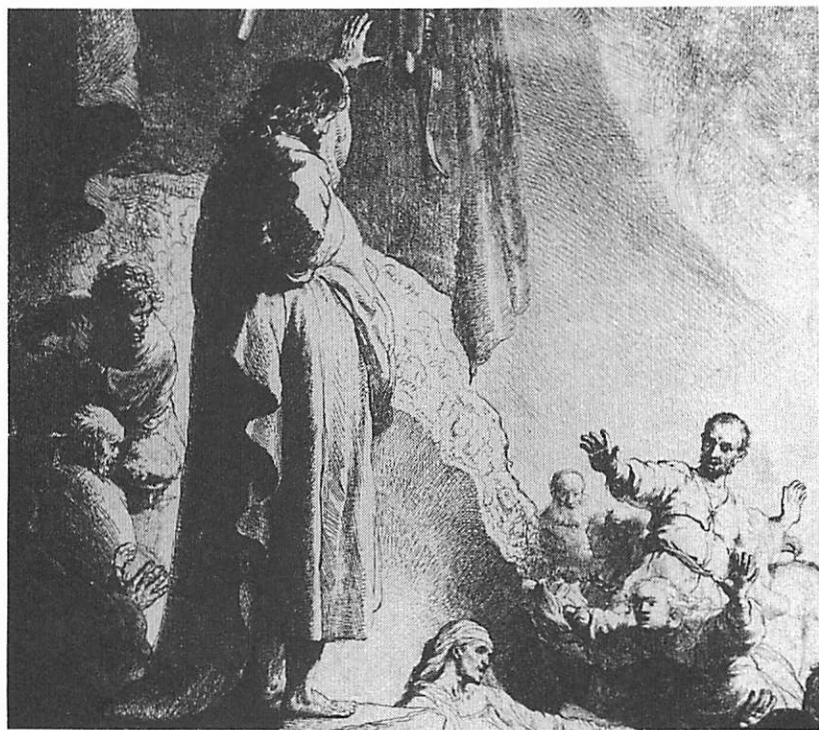
(ヨハネ11: 1-46)

彼は大聲に叫んだ「ラザロよ、出て来なさい！」(ヨハネ 一一・四三)

イエス・キリストが言霊^{ことば}のみ力で死者を甦らせた例をここに挙げれば、其一は「ヤイロの娘」で、彼女は会堂司ヤイロの十二歳の少女であったが、イエスは深く憐み「タリタ、クミ！」(乙女よ、起きよ！)と叫んで少女を甦らせた。(マルコ五・二一-四三、ルカ八・四〇-五六参照)。

其二は、「ナインの若者」で、ナザレの南東方ナインの町の寡婦の独息子の葬列に出遭ったイエスは、柩に添って泣き顔で歩いているその母親を憐んで、柩に手を按ぎ、柩の中の若者に向って「若者よ、お前に言う、起きよ！」と叫んだらその若者は甦った。(ルカ七・一一-一七)。

其三がこの「ラザロの復活」である。エルサレムから東方エリコへと下る途上、三軒ほどの地点にベタニヤという村があったが、そのマルタ、マリヤ姉妹にラザロという兄弟がいたが、彼が死んでしまった。埋葬されて四日目である。マルタはこの時も動的で、イエスを出迎えて問答をした。そのときのイエスの言「我は復活なり生命なり……」(ヨハネ 一一・二五、二六)に注目しなければならない。而もイエスは深い涙の人で、この時も涙し給うた、マルタ、マリヤの涙と共に。ラザロの墓場に来て、イエスは天を仰いで叫んだ「父よ、お聴き下されたことを感謝いたします……」、まだラザロは死んでいるのに、イエスは既に先を見て斯く叫んだのである。そして大声で「ラザロよ出て来なさい！」と叫んだ。ラザロは言下に、手足が白い布で巻かれたままで出て来た。何たる驚くべきことか。私もその遺跡を訪ねたが何とも印象深く、キリストの永遠の聲が天界から……！



(ヨハネ40：1—44) ラザロの復活（レンブレント）

10月14日

我も汝を罪せじ

(ヨハネ 8：1-11)

作詞1979. 12. 6

歌詞S. 245「おもひ出づるも」

1 みめ美しく 純情の

女を捕へ 連れ来たり

パリサイ人ら 学の徒ら

イエスのみ前に 曳き出せり

2 「師よこの女 道ならぬ

わざをせし時 捕へけり

律法によれば 石をもて

打つべきなるぞ 如何にせん」

3 師は身を屈め 地の上に

もの書き給ふ 應へせず

偽善者どもは いらだちて

返答を求め 問ひ迫る

4 師は身を起こし 言ひ給ふ

「汝れらのうちの 潔き者

石を投げ打て！」かく言ひて

再た身を屈め 書き給ふ

5 この聖言に 胸打たれ

老ひも若きも 手の中の

石を落して 次ぎ次ぎに

姿を消せり 罪びとら

6 師は身を起こし 見給へば

女と師のみ 残りたり

「女よ汝れを 責むる者

何処に在りや」「誰もなし」

7 情け深くも キリストは

彼女に手を按ぎ 言ひ給ふ

「我も汝れをば 罪せじな

再びすなよ いざや往け！」

8 人の心を 知り給ふ

主のまなざしは いと深し

審きと赦し あざやかに

現はし給ふ 荷ひつつ！

「われも汝を罪せじ」

ヨハネ八・一一

ヨハネ福音書八・一一——を讀者は読んでこの詩（讃歌）を読んで下さい。解説の代りに自作の讃歌を載せた。

ヨハネ第八章のこの記事はルカ第二章の終りにあるべきか、過越の祭の前の一件。



(ルカ15：3-7) 迷える一匹の羊

10月15日

放蕩息子

(ルカ15:11-32)

「この我が子、死にて復た活き、失せて復た得られたり」
 一五・二四

頸髻に白髪がまじり始めた親仁が窓辺に寄って、野末を見やっている。幾日も空しく過ぎてゆく。何を待っているのか。家には毎日野良に出て働く律義な長男がいる。気も姿も四角四面だ。と、ある午さがり、陽が西に傾きはじめた頃、はるか彼方にぼつんと動く影。あれは人か獣か。家を出ていったあの次男坊にしてはあまりにも変り果てた姿ではないか。跣足で襤褸を着ている。正に乞食同然の恰好である。瘦せ細っているが歩きっぷりからすると次男坊らしい。直感した親仁は家を跳び出して走っていった。七十路を越えた人とは思えぬほどの力強い走り方である。親仁と書くように、正に父の仁が力の秘密であった。イエスはこの情景を述べて次のように言った「彼れ(息子)がなほ遠く離れていたのに、彼の父は彼を認め、情動してあわれみ、走って行って、その頸に倒れかかるようにして抱きつき、彼に心ゆくまで接吻した」と。これは碎けた魂の立ち帰りに対する神・キリストの無条件的なゆるしの愛である。

これはルカ福音書第十五章の有名な「放蕩息子」の譬話であるから、聖書を読んでことの次第を知って下さい。次男は父から離れて独立を志したはよかったが、神から離れて放蕩三昧でどん底に落ち、「神と父に罪を犯した」といって帰って来た。長男は父の許で働いてはいたが、心が父からも神からも離れて自己を義としていた。だから弟が帰って来たのに父と共に憐れんで迎えず、審いた。父の言「このわが子、死にて復た活き、失せて復た得られたり」は、神の万人に対する悲願本願である。



(ルカ15：11—32) 放蕩息子（レンブレント）

10月16日

「恵^{二四・一五}福なるかな神の国でパンを食べる人は」。私^{二四}はお前たちに言う「かの招いておいた者のうちわが晚餐を味い得る者は一人もない。」(ルカ一四・一五、二四)

イエスはあるパリサイ人の頭領^{かしら}の家に入った。そこでいくつかの問答をした。それを聞いて、「神の国でパンを食べる人は恵まれた人ですね」といった。そこでイエスは次のようなことを語った。

ある人が盛大な晚餐をもうけて人々を招待した。時刻が迫って来たので案内の従僕を遣わした。第一の者は、田地を買ったので行って見なければならぬから、と言って断った。第二の者は、五^ご耦^くの牛を買ったので、どんなかを験すために行くので、と言ってこれも招きを断った。第三の者は、このほど妻を娶^むったので参上できかねるといって断った。従僕が右の事態を主人に報告したところ、主人は怒って従僕に命じた、「はやく街の大路小路に行つて貧者、不具者、盲人、跛者などを伴れて来てくれ。従僕は直ちにそのようにしたが、なほ余席がある旨を報告すると、主人は「道やまがきの辺に行つて人々を強いて連れて来て、わが家に余席がないように満たせよ。あの招待しておいた者たちの一人も私の晚餐を味い得る者は無い」。所謂選民も所謂キリスト者も天国に入りそこなつて、本当の人間が天国に入るといふものだ。

私は一九四〇年以来日曜の集会をやっているが、日曜集会はキリストの霊的な饗宴で天来の力を賜るものである。この天的饗宴に右の例話のようなさまたぎの理由で来ない人たちがいる。聖霊が呻いている。どなたでもどうぞ日曜の聖書饗宴に！

10月16日

(詩) 主の大饗宴 (ルカ14:15-24に因みて)

作詞:1986. 8. 1.

歌調:「追憶」(起句:「星かげやさしく」)

1 ゆたけき夕食^{ゆうしょく}ぞ 設けられたる

招かれたる人 使ひの者に

「田地を買ひたり 我見ざるを得ず

此度^{こた}びはゆるせよ」再たとなき招き

ああ拒めり その夜

2 「われ五耦^{いっぴき}の 牛を買ひたり

これを験^{あまね}すため 往かざるを得ず」

「われ妻帯せり 往くこと能はず」

呼ばれし者たち 断はれりすべて

ああ何たる ことぞ

3 僕の報せを 家主^{あなうぢ}は聞きて

怒りて街路^{まちみち}より 貧しき人と

身体障害の 人々を呼びて

席に着かせしが なは余りありし

ああ世人^{よんど}を 呼べり

4 アブラハムの子ら キリスト教徒

名のみの信にて サタンに負けて

世とその慾とに 心乱れなば

主の大饗宴 招かれ往く者

ああ一人も 無きぞ

5 キリストの僕! 主の日を遡り

聖書^{みま}の靈泉に 力を受け

六日の旅路を 勇ましく歩み

道往く人にも 靈水を頒たん

ああ饗宴の 恵み!

10月17日

盲人バルテマイ

(マルコ10:46-52)

(マタイ20:29-34)

(ルカ18:35-43)

「ダビデの子イエスよ、我を憫み給へ」……盲人上衣を脱ぎ捨て、躍り上りてイエスの許に来れり、……「わが師よ、見えんことなり」。イエス彼に「往け、汝の信仰汝を救へり」と言ひ給へば直ちに見ることを得、イエスに従ひて道を往けり。(マルコ10:47、51、52)

イエスは南下してヨルダンの下流、エリコの町に來た。海面下二四〇米、世界最低の町である。イエスは弟子ども及び大いなる群衆と共にエリコを出ようとした。すると、路傍にいた盲人バル・テマイ(テマイの子)がナザレのイエスが通りかかると聞いて、叫び出した。「ダビデの子イエスよ、我をあわれみ給へ」。これは全身からの叫びであった。ダビデの子とはメシヤ、救主、というのと同義なのである。「主よ、あわれみ給へ」である。忠犬が主人を見て、おなかがすいたといつて「ワンワン」と吠えるのと同じである。ところが心なき大衆が黙させようとしたが、この盲人は叫んでやまない。イエスは立ちどまつた。「彼を呼べ」と言つた。バルテマイは文字通り欣喜雀躍した。「上衣を脱ぎ捨て躍り上つて」イエスの許にやつて來た。イエスの問いに対して「先生、見たいのです！」イエスは彼の全身的な叫びと、上衣を脱ぎ捨てて立ち向つて來たことで彼が棄身で求めているのを見たので、言下に受けとめて、「往け、汝の信仰汝を救へり」と言つた。盲人にいきなり「往け」とは驚くべき言だ。直ちに開眼してイエスに従つて道を歩くのであった。イエスの「汝の信仰汝を救へり」という言に瞶いてはいけなない。「汝がかくも私を通してはたらく神の力を信じたことが、救となつた」の意である。

10月18日

パリサイ人と取税人の祈り
(ルカ18: 9-14)

けれども取税人は遙か彼方に立って、目を天に向けることさえできず、胸を打って言った「神さま罪びと私をお憐れみ下さい！」（ルカ

八・一三）

イエスはよくある偽善的な宗教人のタイプと正直な心の人間とを祈りの相で対比した。これは譬話というよりも一つの例話と見て可い。パリサイ（人）は神殿の内庭で祈る。取税人は外庭の隅で祈っている。律法を知り、律法を遵って神の前にも人の前にも自己義認をやっているパリサイは昂然と立って心の中でこう祈った。「神よ、私は他の人たちのように強盗や不義や姦淫をするような者でなく、またこの取税人のようでないことを感謝しています。一週に二度は断食し、すべて取得したものの十分の一を献げています」。ところが取税人は右掲のように、すがたも心もくづはれて「神さま、罪びと私をおあわれみ下さい！」のほか何も言えない。魂が砕け、平伏して神にただ無条件のあわれみを願う。かかる者を神・キリストは無条件にゆるし、抱き給う。神はあわれみをキリストの十字架で決定的に与えておられる。それが贖罪である。霊的十字架を冥想し、その下でこの取税人のようにぶっ倒れて祈ると、決定的な贖罪が与えられている霊的現実に入る。そこに聖霊が与えられる。義とし給う内容が聖霊であることに一般のキリスト教界は気がついていない。「信仰によって義とされる」とは、十字架の赦しの恵みを体受すると聖霊という義と愛の内実が与えられる。そうでないと信仰はいつまでも観念の域を脱し得ない。パリサイ人サウロはこれに気がついて己が義を棄てた。

10月18日

(詩) パリサイ人と取税人 (ルカ18: 9-14に因みて)

作詞: 1986. 8. 2.

歌調: 「荒城の月」 起句: 「春高樓の」 穂麻太郎作曲

1

パリサイ人と取税人
宮にのぼりて祈りせり
パリサイ人は立ち上り
心の中にかく祈る

2

「神よ感謝す我が義をば
強奪も不義も姦淫も
他人のこと。献物
律法の如し断食も」

3

見よ、はるかな取税人
平伏し拝み胸うちて
「あはれみ給へ神よ主よ
罪びと我れを」 かく祈る

4

パリサイ根性自己義認
おのが信仰誇るなり
主の本願は唯だ一つ
十字架・聖霊受くるのみ

5

我らもつねにあるがまま
ただ平伏して祈りつつ
キリストの無者自覚して
荷いて往かんどん底で

10月19日

寡婦のレプタ二枚

(マルコ12:1-14)

(ルカ21:1-14)

「この寡婦は其の乏しい中から持物の總てを、自分の生命の糧を皆投げ入れた」(マルコ二・四四)。

イエスは地上を去る時が近づいていた。彼は神殿の賽銭箱にお金を投げ入れている宮詣のありさまを見ていた。いろいろな人が思い思いに投げ入れていた。すると襤褸衣を身にまとった寡婦が現われた。彼女は財布をさかさまにした。レプタ二枚が掌の中にこぼれた。財布は空っぽになった。彼女はそのまま投げ入れて深く祈りを捧げた。いかにも清々しい面持ちで階梯をおりて行った。イエスはじっと見ていた。とその瞬間すぐ弟子たちを呼び寄せて言った、「よく聴け、あの貧しい寡婦は誰よりも沢山投げ入れたのだ。ほかの人たちはありあまるなかからいくらかを投げ入れたが、あの女は生活の糧代を全部捧げたからだ」

レプタはユダヤ貨幣の最低のもの、レプタ二枚は一日の糧代、それを全部捧げたので、彼女は正に自分自身を神に捧げた生命賭けの参拝をしたのであった。やもめのこのすがたがやきつくようにキリストの目にとまったのである。弟子たちよりも本当の弟子がそこに動いていたのであった。彼女は人知れず姿を消した。

新島謙がアメリカを去るに当り、キリスト教大学創設の志を別れの挨拶の中で述べたら、献金がなされ、その中に二ドルの献金をした老人がいた。それはその時の彼の持金のすべてであった。彼は何哩かの帰り道をとぼとぼと歩いて帰ったという。貴い愛のすがたである。

我々も一日を一生として神に己れを全的に捧げる生き方を！

10月20日

十人の乙女

(マタイ25: 1-13)

ところで心がけの好い乙女たちは燈油を器うつわに入れてランプと一緒に携もえた。(マタイ二五・四)

このキリストの譬話はマタイ福音書特有の記事である。十人の乙女の中、五人は心がけが好く、五人はぬけている。それは天国への準備のはなしである。新郎たるキリストを迎えるわけなのだが、新郎が夜おいでのようだからカンテラを用意して待つことになった。来臨がおそいのでまどろみ始めた。と夜半に「さあ、新郎のおいでぞ、お出迎えをしなさい」と呼ばはる声がある。乙女たちは燈火の用意をしたが、心がけのよい五人は燈火と一緒に燈油をもっていたが、ぬけた五人はその燈油の備そなえがないので、頒おけてくれとたのんだが、そんな余分はないから、買って来なさい、と言った。不心得の五人が買いに行っている間に、新郎が来たので、彼と共に婚筵よめいに入った。天国の門は閉しまれた。あとから五人の乙女が来て、「主よ、主よ、開けて下さい」とたのんだが、「私はお前たちを知らない」と言って断ことわられた。

天国の婚宴に招かれる資格は何であろう。燈火と燈油は何を意味するのだろうか。我々は地上のどんな物も携もえては行けない。聖書すらダメである。すると魂が、魂の中にもっているものでなければならぬ。それは聖靈のほかにない。燈火が聖靈とすると燈油は聖靈の賜たましひでなければならぬ。賜は千差万別、多種多様である。それを一言で言えば、神・キリストの栄光を天賦の才能資質で具体的に体現した実存そのものであらねばならない。それは何らかの意味で世のため人のためになったはずである。自分のためではない。そういう在り方が天国ゆきの燈火燈油ではないか。



(マタイ25：1-13) 十人の乙女（ブレイク）

10月21日

羊と山羊

(マタイ25:31-46)

「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なるこれらのいと小さき者の一人になしたるは、即ち我になしたるなり」(マタイ二五・四〇)

「十人の乙女」の譬話のように、この「羊と山羊」のはなしもマタイ福音書特有の記事である。

キリストが栄光を以て、諸々の天使を率いて来臨するとき、その栄光の御座の前に諸々の国人を集め、これを二つに別けようとなさる。そのやり方は牧羊者が、羊を右に山羊を左にしてわかるように、諸国人を大きく二分する。即ち王者が右の者たちに言う「わが父(神)に祝福されたる者たちよ、来りて世の創めより汝らのために備えられたる国を嗣げ。汝らわが飢えし時に食はせ、渴きし時に飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、裸なりし時に衣せ、病みし時に訪ひ、獄にありし時に来りたればなり」と。すると右の者たちはいつそんなことをあなたにしましたかと反問した。それに対しての答が右掲の言であった。即ち「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なるこれらのいと小さき者の一人になしたるは即ち我れになしたるなり」。弱者、困窮者、旅人、病者、被迫害者等を助けた愛の心の人々は永遠の生命を天国で与えられるが、その反対の左の者らは永遠の刑罰を地獄で受けるという。一言以て表現すれば、思い遣りあつく、愛の行為を以て具体的に、人を助けた人たちは天国人であるというので、これは世界の億万人を天国か地獄かに二分する重要な標準であるに相違ない。山上の大告告の第五「恵福なる哉、憐みある者」である。

10月22日

ナルドの香油 マルコ 14 : 3-9

マタイ 26 : 6-13

(ルカ 7 : 36-50)

(ヨハネ 12 : 1-8)

一四・三

イエス、ベタニヤに在まして癩病人シモンの家にて食事の席につき給ふとき、或る女高価なる生粹のナルドの香油の入りたる石膏壺^{アラバストロン}をたづさへ、その壺をうち砕きてイエスの首に灑ぎ^{こぼ}たり。……「この女はなし得る限りをなしてわがからだに香油を灑ぎ、豫め葬りの備へをなせり。誠に汝らに告ぐ、全世界いづこなりとも福音伝道のなさるる處には、この女のなしたることも記念すべく語らるべし。

過越の祭の営まれる春ニサンの月の一日日が近づいて来た。そしてイエスがゴルゴタへ往く日もあとにつづく。そういう土壇場の迫りを感じて、ある女(マルコ、マタイ共通)が右の場を訪れた。彼女はインドのナルド産の極上の香油、三百デナリといえは三百日間の生活費に価する香油の入ったアラバストロンを持参している。彼女はこれが主イエスとお別れと思つて、もうこの壺は要らないとの心で、壺をうち砕き、心をこめてキリストの頭上から全身に灑ぎかけた(マルコ、マタイ共通)。香油は彼女のあつき涙、あつき血潮であつた。ところがそこに居合わせた者どもが、勿体ないことをするなど彼女を詰つた。かしキリストは汝ら何を言うか。此の女は心を尽くして私の葬りの備えをしてくれたのだ、と深い響きの声を放った。誰も自分の心境を察してくれない中で唯一人全身的な涙をもつて灑ぎかけてくれた女の愛をイエスは全身で体受した。それで爆発した聖言が右の一四・九。この女こそは十字架、墓場、復活の主を極めて慕つた女マグダレーナと私は見る。



マグダレーナがキリストの首に香油をそそいでいる画（斎藤桂子製作）

10月22日

(詩) ナルドの香油

作詞1981, 8, 15.

歌調:「庭の千草」〈Tis the last rose of summer〉(アイルランド民謡)

1 ベタニヤなる ある女
石^{イバ}の壺^{ハコ}を うち割^きりて
主^きの首^{くび}に 心こめて
ナルドの香油を 灑^ふぎけり
2 主の弟子どもは これを見て
勿^い体^しなやと 憤^いる
「それを売^うりて 貧者のため
施^ししごとを なすべきに」
3 主は言^いひ給^{たま}ふ「この女
葬^{くわ}りのため わがために
涙^{なみだ}ながら 灑^ふぎたるぞ
我^{われ}はほどなく 別^{わか}れ往^ゆく
4 まことに告^つげん 全世界
いづことなりとも 福音^{きふん}の
伝^{つた}へらるる ところにては
憶^{おも}えらるべし この女！」

Tatsuo Koike, 1981, 8, 15.

ベタニヤなるあるおん
な アラバストロンをう
ちわりて主のこうべ
にこころこめてナル
ドのこうゆをそそぎけり

10月23日

「我もし汝を洗はずば、汝われと関係なし。」(ヨハネ一三・八)

これはヨハネ福音書特有の記事。時期はユダヤの三大節の第一たる過越すゑこしの祭のとき。この祭は今の春分の頃。過越及びこれにつづく除酵祭の由来は出エジプト二・一―二〇を参照。イエスはこの過越の祭のときに最後の晩餐を思い立った。十字架の死が迫って来たので、イエスの胸に閃いたのが「洗足」であった。そこで晩餐に臨む前に上衣をぬぎ、手ぬぐいをまとい、鹽たみしに水をいれて、弟子たちの足を洗い、且つ拭ぬぐい始めた。ペテロの番が来た。ペテロは驚いて訊いた。「私のすることは、お前は今はわからない、今に悟るときがくる」とイエスは言った。しかしペテロは言った「私の足なんか、いつまでも洗はないで下さい」。するとイエスは「もし私がお前を洗はなければお前は私と関かわりがない!」と。ふしぎな言であった。即ち、足を洗うことは、我々の罪を贖こころう意であった。贖罪による救済のためにイエスは地上に現われたのである。洗足を拒むことは贖罪にはあづからないでいいということになる。それではキリストからの本願的關係が切れるから、キリストはこのように言ったのである。十字架の贖罪のあと、復活、昇天するキリストが約束したのは聖霊の降臨であった。聖霊が五旬節の日に降って、ペテロは、始めて、十字架の贖罪と共に洗足がその豫徴であることを悟った。

10月23日

(詩) 過越の祭——洗足

作詞：1980, 6, 15.

歌調：S 330「あめなるわが家を」

7	6	5	4	3	2	1
「われもし汝を 洗はざれば 汝と我とは かかはりなし!」	ペテロはかしこみ 「主よ足をば 洗ひたまはざれ とこしなへに」	弟子らの足をば 洗ひ給ふ 鹽 たらひ に水くみ 僕と成り	最後の晚餐 ゆうげ の 時にのぞみ 上衣をぬぎすて 布 ぬの を腰にす	イエスには父より 父に還る 正道 まさみち 、權威 みちから 授けられぬ	キリスト世にある おのが者を きはまりなきまで 愛し給ふ	過越 すぎこし の祭 近づきたり この世を去るべき 時は近し
					9	8
					我らも互いに 足を洗ひ キリストの愛を 身につけなん	イエスのわれらへの 関係こそ 十字架・聖靈 みたま の関身 かみはり なれ!

10月24日

最後の晩餐

(マタイ28:20-29)

(マルコ14:17-25)

(ルカ21:14-23)

二六・二六

彼ら食しをる時、イエス、パンをとり、祝して裂き、弟子たちに与へて言ひ給ふ「取りて食へ、これはわが体なり」。また酒杯^{ニ七}をとりて謝し、彼らに与へて言ひ給ふ「汝ら皆この酒杯より飲め、これは契約のわが血なり、多くの人のために、罪の赦を得させんとて流すところのものなり」(マタイ二六・二六、二七、二八)

過越^{すえし}の祭で羔を屠るべき日が来たので、イエスはペテロとヨハネに最後の晩餐の準備を指示した。二階座敷で食につく前に、キリストは弟子どもの足を自ら洗った。

さて晩餐たけなわであったとき、イエスは右掲の如く、パンをとり祝して裂き、十二人の弟子たちに順ぐりに与へて「とつて食へ、これは私の体だ」と言い、次に葡萄酒の杯をとつて謝し、この酒杯から飲め、といって、「これは契約の私の血だ、人々の罪の赦のために流すものだ」といって飲ませた。このマタイ福音書によると、パンに於て永遠の生命が意味され、葡萄酒に於て贖罪の血が意味されている。ヨハネ六・五三―五六を見ると「人の子の肉を食はず、その血を飲まずば汝らに生命なし」とあるように、霊的にキリストを食うことがキリストと一如の生命にあづかることになる。最後の晩餐は正に、十字架の贖罪の血と復活の生命の肉を霊的に受けよ、との聖霊に在るの祈りの現実を意味しておられた。そのような聖餐式を行うことは何も指示していない。それはむしろパウロのコリント前書一一・二五の言による。

10月25日

我は道なり、真相なり、生命なり
 (ヨハネ14:1-30)

「我は道なり、真相なり、生命なり」。「我を見たる者は父を見たるなり」。「何ごとにてわが名に在って我に願はば、我れこれを成さん」。「父は他に助主を与へて汝らと偕に居らしめ永遠に到らしむ」。「助主、即ち父わが名に在って遣はし給ふ聖霊は、汝らによるべの事を教へ、また我が汝らに語りしことを想ひ出さしめん」。「我れ平安を汝らに遺す」、「我往きて汝らに來たるなり」

ヨハネ一四・一―一六・三三は所謂「イエスの袂別遺訓」で極めて重要な内容である。私は是れを「イエスの遺言」と申したい。この遺言を体受する者は永遠の生命を生きることになる。右掲の句はまことに重厚無量のもので、祈り入ってその現実に入るはかはない。キリストの「道」は天道である。我々の地路が天道に即せんことのみ。私が真相と訳した言は一般に真理と訳されているが、単なる理ではない。神の言が体現されている実体そのものがイエスであるので「真相」と訳したい。だから「私を見た者は父を見たのだ」と喝破した。真相は正に真法、神法の相なのである。イエスの言は神(からの)言、イエスの業は神(の力による)業である。「父」と「我」とは相互内住であるから(一四・一〇)。彼自身は無言、無行者、即ち無者である。イエスの名は実名だから聖名に在って祈ることは根源現実で成る。助主、聖霊が降臨すると、イエスの霊言、靈行が身で受けとられ、同質のことが起きる。聖霊が内住すると、本当の平安がくる。この平安には力がある。人生の風波いかにもあれ、難破しない船となる。

10月26日

葡萄樹

(ヨハネ15:1-13)

「我^{二五}れは本当の葡萄の樹、わが父は農夫である。我^五は葡萄の樹、汝^一らは枝である。わが内に宿る者あらば我も彼の内に宿る。この者は多^七に果を結ぶ。汝ら我を離れたら、何ごともし得ない。汝らもし我が内に宿り、わが言汝らの内に留^七まるならば、何でも望むがままに求めよ、さらばそれは汝らに成就する。父の我を愛し給うた如く、我も汝らを愛した、わが愛の内に宿れよ。(ヨハネ一五・一、五、七、九)

キリストは自分が本当の葡萄の樹だ、と言う。自然の葡萄の樹はキリストの徴^{しるし}だと言はんばかりである。ゲエテの有名な句、「あらゆる過ぎゆくもの(現象)は(本体の)映象たるのみ」を連想させるすごい言だ。神はすばらしい農夫なのだ。何と楽しい言ではないか。そして私たちはその本当の葡萄樹の枝であるから、当然キリストに連^{つな}ざるを得ないわけである。幹があつての枝だから、樹液が流れている。キリストの生命が我々の中に流れて我々を活かしている。だからキリストの中に宿らないでは生きようもない。キリストの霊言を全身で受けとると御言が留^{とど}まる。要するにキリストと相互内住内在関係、一如的な現実なのである。第九節、神がイエスの生命、光、愛、一切であることが「父の愛」であった。そのようにキリストは我々一人一人に対して全生命を与えておられることがキリストの「わが愛」である。その愛の内に宿れという。キリストは豊かな生ける宿屋である。どんな宿屋も、キリストという宿屋にはかなはない。私はこの宿屋でキリストの肉を食べキリストの血を飲んで活きている(ヨハネ六・五三―五七)。

10月26日

(詩) 葡萄樹

作詞：1980. 2. 7.

歌調：S. 48 「しづけきタの」

- | | | | | | | |
|-------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|---------------------------------|
| 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 生命の君に 連りありて
永遠の生命を 生きてし在らん | キリストこそは 霊の葡萄樹
われらその枝 生命は通ふ | 「汝れは愛なり 愛の炎ぞ！
聖霊の愛を 貫き生きよ」 | キリストのため 生命を賭けて
友を愛せん み霊は助く | われ主に在りて み力を受け
ひとを愛せん み霊は助く | み父のわれを 愛する如く
汝を愛す わが愛に居れ」 | 「汝れ我が衷に しかと宿らば
祈り求めよ さらば成るべし |
| | | | | 10 | 9 | 8 |
| | | | | 世界に亙る キリストの民
聖霊の愛を生きてし往かん | 十字架の道 地道に歩み
使徒らの跡を 継ぐ者たれよ」 | 「わが葡萄園 わがエクレシヤ
み神の民よ 愛の光よ！ |

10月27日

聖霊、助主、慰主

(ヨハネ16:1-33)

「^{一六・七}けれども私は本当のことをきみらに告げる。私が去るのはきみに益である。私が去らないと助主はきみらに來ない。私が往いたら、^{三三}これをきみらに遣はす」(ヨハネ一六・七)

「きみら世にあっては患難がある。けれども雄々しくあれ、私は既に世に勝ったから」(二六・三三)

ヨハネ一五・二六に「父(なる神)の許から私が遣^つそうとする助主^{パラクレートス}、即ち父から出る真法の御霊が来ると、私について証^{まこと}しをする」とあるように、聖霊はキリストが十字架の贖罪死を遂げたあとで復活昇天してから臨む霊であって、地上のキリストから直接には來ない。このことは極めて大切な真法なのである。一般に真理と訳される「アレーティア」はかくれたものごとがあらわにされた事態をいうので、本当のこと、本当のもの、真法という意味で真理というような観念的なひびきとちがう。「助主」とは弁護のために側に呼び出された者の意で、慰め主とも言われる。我々罪びとの側に立って執り成して助け慰め給うみ霊が聖霊であって、正に十字架の贖罪愛を果したキリストの霊と同質なのである。であるから十字架を信受、体受すると聖霊が臨んでくる。十字架と不可離の霊が聖霊なのである。このことは銘記しなければダメである。「私が去るのはきみらに益だ」とはこの事態をいう。運命、環境、患難、迫害、何が襲って来ようとも聖霊は逆に力強く助け給う。だから聖霊を身に宿すことが何より重要なことなのである。私というからだは聖霊の幕屋、宿屋である。だからキリストと偕に勝てる。雄々しくさせられる。

10月28日

大祭司の祈

(ヨハネ17: 1-26)

「イエスこれらの事を語り終りて、目を挙げ天を仰ぎて言ひ給ふ
 「父よ、時来れり、我は汝に往く。聖なる父よ、我に賜ひたる汝の
 御名の中に彼らを守り給へ。これ我等の如く、彼らの一つとならん
 ためなり。汝我を世に遣はし給ひし如く、我も彼らを世に遣はせり。
 父よ、汝我に在まし、我汝に居る如く、彼らも我らに居らんためなり。
 我は汝の我に賜ひし栄光を彼らに与へたり。これ我らの一つな
 る如く、彼らも一つとならんためなり。即ち我彼らに居り、汝我に
 在まし、彼ら一つとなりて全くせられん為なり。」

ヨハネの伝えたキリストの遺言(一四、一五、一六章)が終つて、イエスが天を仰いで叫ばれた大祭司的な執り成しの祈りが第一七章全部である。その中の数句を右に掲げたが、キリストの祈りのところは、父子(神とイエス)一体一如の如く、神、救主、使徒弟子どもが一如一体とならんことである。神・キリスト・聖霊が三位一体であるように、神・救主・キリスト者が聖霊の媒介によつて一如となる。個人としては神・キリスト・聖霊・我という四位一体の生き方である。聖霊に在って生きることなくしてこれは本ものとならない。聖霊は我々を「本ものたらしめる霊」である。「真相を現せしめる霊」である。

10月29日

ゲツセマネの血禱

(マタイ 26: 36-46)

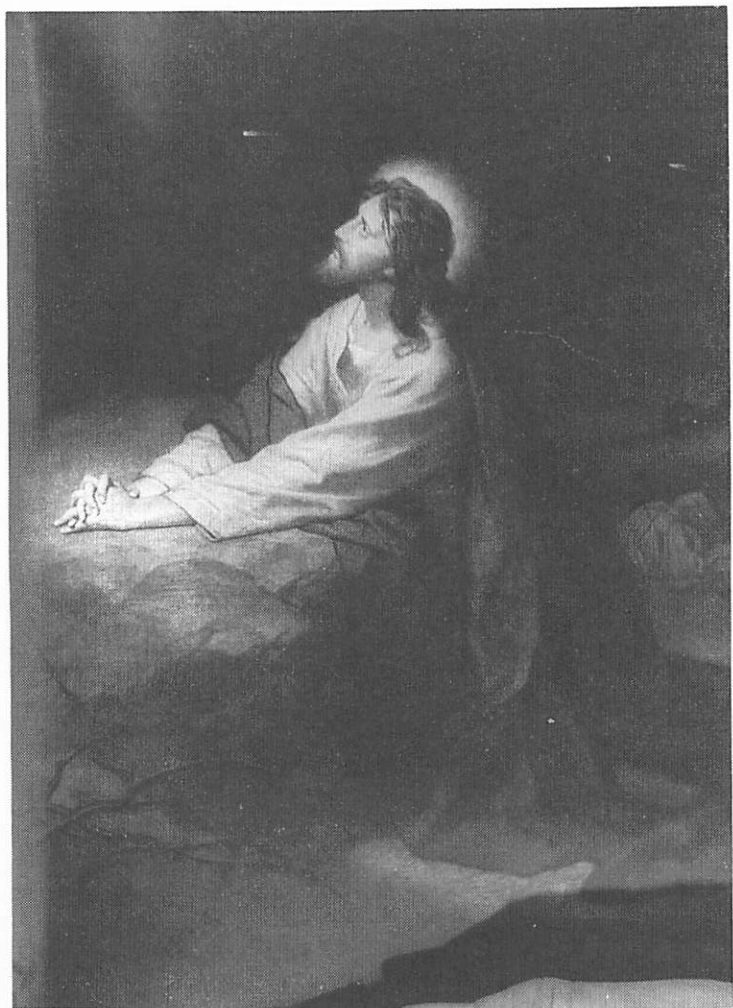
(マルコ 14: 32-42)

(ルカ: 22: 40-46)

二六・三八
「わが魂深く悲しみて死ぬばかりなり。汝ら此処に止りて我と共に目醒め居れ」(イエス) 少し進みゆきて平伏し、祈りて言ひ給ふ「わが父よ、もし得べくば此の酒杯を我より過ぎ去らせ給へ、されどわが欲うままに非ず、汝の御意のままに。」

イエスは十字架の贖罪死を何によって自覚されたか。それはイザヤ書の第五十三章によつてであることは疑いの余地がない。「彼は侮られて人に棄てられ、彼はわれらの罪のために傷けられ、我らの不義のために砕かれ、自ら刑罰を受けてわれらに平安を与ふ」(イザヤ五三・三、五) が特にその預言の焦点である。

そして十字架と復活を弟子どもに三たび豫告した(マタイ一六・二一、一七・九、二〇・一八)。しかしいよいよそれを父神への祈りに於て決定的に体受し給うたのが、エルサレムの東方ケデロンの谷を渡つて入るオリヴ山林の中のゲツセマネ(「油しぼり」の意)の血禱に於てである。ペテロ、ヤコブ、ヨハネも共にいたが彼らは魂が眠っていた。天から御使が現われてイエスに力を添えたが、イエスは祈りに於て文字通り油汗をしぼられ、滴る汗は血の雫の如くであった(ルカ二二・四三)。正に血禱であった。いきなり天界にエリヤ以上に昇るべき人が、贖罪のため十字架されねばならないという人類の歴史を両断する瞬間の祈りであった。人間イエスは三度同じ祈りを祈り、死の苦しみをここに受け、自己の願に死に、神の本願を体受し給うた。神の本願の化身となったイエスはユダの裏切りを受けローマ兵に泰然として捕われたのである。



(ルカ22：39—46) ゲッセマネの祈り (ホフマン)

10月30日

十字架 マタイ27：15-26

マルコ15：6-15

ルカ23：13-49

ヨハネ19：17-30

二七・二〇

祭司長、長老ら、群衆に「バラバの赦されん事を請はしめ、イエスを亡ぼさんことを勧む。総督（ピラト）答へて彼らに言ふ、「二人の中いづれを我が赦さん事を願ふか」彼ら「バラバ」。

ピラト言ふ「さらばキリスト（メシヤ）」と称ふるイエスを我いかにすべきか。皆いふ「十字架につくべし」。（マタイ二七・二〇、二一、二二）

民の長老たち、祭司たち、律法学者ども、パリサイ派、サドカイ派、ローマの官憲・兵卒などに敵視され、弟子どもに知らん顔され、弟子の長ベテロにすら否まれ、弟子の鬼才ユダに裏切られ、雷同的な民衆に棄てられ、政治犯、瀆神者ときめつけられ、囚人に上まわる極悪人とされ、悪口雑言を浴びせられ、唾きせられ、鞭打たれ、衣をはぎとられ、緋色の上衣を着せられ、荊の冠をかぶせられ、「ユダヤ人の王、安かれ！」と嘲弄され、再び上衣を剥かれ、血の雫と汗が顔に流れ、傷だらけの軀にされ、侮辱の極みの中を七十疋もある十字架を負わされて、エルサレムの城門外北西のゴルゴタ（髑髏）の丘へと、ヴィア・ドロサ「苦難の道」をよろめき辿らしめられゆくイエス！

人間の、人類の、世界歴史の過去、現世、将来の、どうにもならぬ不信の、忘恩の、逆の、悪魔的、地獄的、闘争的、虚偽と混沌と矛盾と擾乱の実相の逆徴が、イエスの、キリストの、十字架を負い給うこの姿である。十字架されたイエスの宝血がゴルゴタの土に泌み入る。誰か知らん「人類の罪を負う神の羔」なる文字がキリストの血で大地に書かれていたのだ！

10月31日

今日私と一緒にパラダイスだ！

(ルカ23：39-49)

「私は本当にお前に言う。今日、私と一緒に、お前はパラダイスだ！」(ルカ二三・四三)

ゴルゴタの丘の上にキリストの十字架に並んで右と左に十字架が立っていた。一方の悪人はイエスに不遜にも「あんたはキリストぢあないか。自分と俺たちを救え！」と囁いた。すると他方の悪人が禁めて「お前は同罪のくせに、神を畏れないのか、俺たちはやったことに對する報いを受けているのだから当然なことだが、この人は何にも悪いことはしていない」と言い、更にキリストに向って、「イエスよ、聖国にお入りになるとき、どうか私を憶えて下さい」と懇願した。この悪人は、最後の瞬間に神を畏れ、罪を悔い、キリストに、心砕けて、私を憶えて下さいと告白した。

キリストはその言下に、「私は本当にお前に言う。今日、私と一緒にお前はパラダイスだ！」と。この一言は、キリストが吐露した言の中で最も慰め深い救いの言ではないか。私も人生の終りの瞬間に、この罪びとと同じ聖言を賜りたい一念である。キリストのどん底の思い遣り、白熱の愛、深い泪をうちにふくんだみ言を賜って天界に飛んでゆきたいものである。若し墓碑が立てられるなら、キリストのこの聖言を刻んでもらいたい。

そして毎日「今日汝は我とパラダイス」の聖言の中を歩いて往こう。

人類をもし二分する規程があるとすれば、神の前に平伏す魂と神の前に平伏さない魂の二分ではないか。傲慢な魂はサタンの国へ、平伏す魂は神の国へ。天国、極楽か、地獄、陰府かである。しかしまた中間の人間もダンテが言うように案外多いのであろう。ともあれ、毎日がキリストと共に天国である在り方がある。み霊のお宿の人たるのみ。